

2015年路上文学賞応募作品

「手紙」

作：小山正平 編集：服部広隆

子どもの頃から困っていたことが、たくさんあります。というか、困っていたことがもう、数え切れないくらい、それこそたくさんあるんですけど…。

僕の家はお寺でした。

これは大したことではありません。

僕の兄はアル中でした。あるとき、兄は酒を浴びるほど飲んで、風呂に沈んで寝ていました。「兄貴ーなんしょっとー兄貴ー」僕は服のままびしょびしょになりながら兄を引き上げました。飲んだくれた兄貴は本当に重かった。風呂から外には引き上げられなくてずっとおぼれないように兄を支えていました。

でも、これも大したことではありません。

僕の弟は、アル中で摂食障害で、激しい家庭内暴力をふるい、窃盗で何度も逮捕されました。

これはちょっとえらいことでした。

中二のとき、父が亡くなりました。

これも大変でした。

僕は、ホームレスを経験しました。

これはもう、全く本当に大したことでした。

でも、それよりも、僕がずっと悩んできたことは母との関係でした。

そもそも、僕自身、子どものころから「どもり」があって、ずっとヒトとの付き合いが苦手です。どうやってヒトと付き合いえばいいのか分からないので、できるだけ付き合わないようにはしてきました。いつも、話を聞けと怒られるので、大学の先輩が卒業するときの寄せ書きには、いつも「人の話を聞くようにします」と書いていました。僕がもらう寄せ書きには、「彼はわが道を行く」とか書かれました。訪問販売が断れなくて、全く必要のない布団を買わされました。光電話の営業電話がきて、自分では断ろうとしているのに、いつの間にか契約の話が進んでいってパニックになってしまいました。隣の家の人にお金を貸してくれといわれて、やっぱりパニックになって10万円貸したこともあります。もちろん、お金は返してもらえませんでした。それ以外にもお金はよく貸しました。仕事でサンプルの実験や評価の仕事を頼まれたとき、「分かりました」といいましたが、そもそもどうやって実験するのか、それ自体がわかっていなくて、言い出せないまま2、3日が過ぎて、「はじめから出来ないなら出来ないと言え」と滅茶苦茶に怒られました。

後に、ホームレスになったときにアスペルガーと診断されました。

僕は、ずっと母の言うことに逆らわずに生きてきました。母はずっと専業主婦で、僕に高校に行け、大学に行け、公務員になれ、実家に帰って来いと命令しますが、僕の話は全然聞いてくれませんでした。少なくとも僕はそう思っていた。僕は幸い学校の成績は悪くなかったので、母の言うがまま、島の高校に行って、本土の国立大学の工学部応用化学科に進学しました。それでも、大学に入ってから論文や研究レポートが全然書けなくて、成績がどんどん落ちて、卒業できなそうになったとき、母に相談しました。母は相談ただけで怒り狂い「大学やめればよかろーが」と無茶苦茶言いました。大学は何とか卒業出来たのですが、就職活動はちっとも出来ませんでした。僕は母に「バイトをしながら就職活動をする」と言いましたが、「バイトやらせんで帰ってくればよかろーもん」「息子の一人くらい大学行かせたかっただけたい、就職やらせんでよか」と聞く耳を持たないので、結局、言われるがまま実家に帰りました。就職活動につまずいた僕は、家には帰ったものの針のむしろで、弟の暴力にも耐えられず、また本土に出て、ネットカフェや友達の家を転々としながら日雇いのバイトをしました。日雇いの引越しのバイトでヒザを大ケガして実家に帰ったとき、今更公務員になれと言う母に怒りをぶつけました。

「何で、あのとき、僕の就職に反対したと。お母さんは、僕を陥れたかったっちょろ」  
「なんいいよっと、子どもば陥れる親がどこにおるとね」  
「じゃあ、何で僕の話ば聞かんと。すぐ電話切ると。無理やり命令ばするとね。」  
「正平がなんばいいよっとかお母さんには、わからんかったたい」  
「わからんなら、よく聞かんね。免許も就職も大事なことやないとね」  
「お母さんはお父さんじゃないけん、就職のことはよくわからんけん」  
「わからんならわからんていわんね。反対したやないね。ダメとかさせんとか、帰れとか反対したやないね。何で今更公務員ね。公務員は文系に行った人になるとよ。そげんことも知らんめーが」

「何て言いよるか分らんかったと。いったやないね」  
僕は今日は言うてやるぞ、今度こそ言うてやるぞと思って言ったのに、母の言うことはおかしいと思うのに、結局うまくいえなかった。すっきりするどころか、余計にもやもやしました。母は、いつも、「女の子が欲しかった」「女の子に生まれてくれればよかったのに」「お前が女の子だったら、弟は産まずにすんだ」などと言っていました。どうも、母は僕を陥れようとしているんじゃないか、陥れることが母の願いなんじゃないのか、本当にそう思っているわけじゃないけど、そんな風に思うこともありました。でも、結局、母には伝わらないんだ・・・そのときそう思いました。

僕は、その後、頑張って派遣でいろんな仕事をしました。どれも、全然うまくいきませんでしたけど。それでも、なんだかどうにでもなれという気持ちで受けた会社で、アメリカで仕事をするという、自分でもわけのわからないことが決まり、本当にアメリカに行くため、

パスポートを取りに行った日、僕は見通しの悪い駐車場から友人の車の後を追って車を出そうとして…いや、優先車両をよく見もせず車道に車で飛び出して…直進してきた車に激しく衝突しました。

僕は自分で言うのも何ですが、善良な人間で、まさか、人生の中で警察に逮捕される日が来ようとは思っていませんでした。でも、確かに警察に逮捕されていました。そんなはずはないと思ってみても、目の前に刑事さんがいて、やっぱり、何だか本当のことに思えませんでした。取調べを受け、自動車運転過失致傷ということで裁判にもなりました。おかげで、就職もアメリカ行きもなくなりました。正直、今考えると、アメリカに行っていたら、もっととんでもないことになっていたかもしれないのだけど。

これで、ゴタゴタしている間に、家を出て行くことになって、これが最後だという気持ちで僕は母に手紙を書きました。何枚も何枚も書いたその手紙を、母ともこれでお別れだとポストに突っ込みました。

「はじめからこうすれば、お母さんの目を覚ますことができたかもしれんけど、これは、もうどうでもいいことだ。これくらいいわんとお母さんはいまだにおれをおとしいれようとすると思うから手紙を書く」

僕は怨みのたけをこめて、これでもかと母に書きたいことをぶつけました。何故就職に反対した、何故、話を聞いてくれなかった、と。

—話を聞いてくれなかった。僕の話。それが、言いたいことでした。

本当は、分かっています。就職のことは大学に入ったときは考えていなくて、大学を出たいとしか考えていなくて、いや、高校を出てからずっと就職のことは考えていなかった…というか、そうです、就職を先延ばししたかっただけです。大学院も考えましたが、論文やレポートがもう無理だと分かっていたし、というか、それも就職を先伸ばしにするだけで、確かな研究テーマがあったわけではなく、というのは、全て、人付き合いが苦手な僕が就職するということに自信を完全に失っていたからです。

それでも、そんな気持ちも分かってくれない母に何とか分からせたかった、自己満足です。

僕がアテもなくただ、九州の都会だから、それしかもう思いつかなくて、博多に旅立つために島を出る日、母からA4のノートを渡されました。ノート一冊、裏表紙の裏まで、僕への返信で埋め尽くされていました。

「正平から言えば、お母さんは悪党やちやろうね。お母さんは善人だと思って来たけど、小さい時から、二番に生まれ影がうすいというか、おとなしい正平だったから、後の二人はよくしかっていました。でも、正平はあまりしかったことはないのではないかと思う。

正平が人とちがって見えてきた時は、高校生の時でした。母はこのころから自慢でした」

「母はこのころから自慢でした」

読むだけで半日かかりそうな、母からの長い長い手紙を持って博多に行くバスに乗りました。

—こうして、僕はホームレスになりました。

## 講評（星野）

せつない話でした。小山さんもお母様も、世の「普通」に振り回されたのですね。小山さんも、お母さんも、思いを抱えながら、相手のことを考えると見えなかった。それが、最後に書いた言葉になって噴き出す。口にする言葉にはできなくても、書くと出てくる言葉ってあるんですよ。タイミングがいつもすれ違ってしまふことが苦しいですが、それでも、言葉になったから伝わったこともあるのだと思います。会話の言葉遣いに命が通っているのを感じました。